

吉野川よ、君は何者だ。 安永有里子

君が代。センターポールの日の丸。首にかかる金メダル。並ぶ仲間。
1番高い所に立った時私にみえたものはあれだった。

あと1日、あと1種目、あと1歩、8人で戦う最後の日。
最終種目ダウンリバー、世界1に大手をかけた前日の夜は眠る事ができ
なかった。それまでの成績はスプリント2位、H2H1位、スラローム
2位、そしてダウンリバーで1位を取れば総合優勝という位置にいた。

翌朝、会場へ向かうバスに乗るチームメイトともあまり言葉を交わすこ
ともなく皆、横に見えるドンと勇ましくかまえる吉野川をじーっとみて
いた。戦うぞ、戦おうと言わんばかりの前向きな雰囲気言葉なくとも
感じ取れた。

会場に着くとたくさんの人から応援の言葉をいただいたり各国の気合い
の声とでスタート地点は熱気で溢れかえっていたように感じた。

ボートを受け取りウォーミングアップに入った。体は調子がいいものの
普段している同じ内容のアップには息がすぐに上がっていた。スタート
タイムは9時15分。近づいてくる時間に徐々に恐怖を感じたのは今で
も思い出せる。レースを初めて恐怖を感じるレースは初めてだった。ス
タートライン手前のゾーンに入れる時間がやってきた。各瀬の共有等を
済ませボート内は集中と静かなる闘争心でピンと張った空気を漂わせて
いた。6艇同時スタート。(オープン女子は2グループに分かれていた)
“スタートで出れなかったら終わり”みんなで共有していたものの一つだ。
まず先頭を走ること。絶対。絶対に。なんとしてでも。

1分前。30秒前。大人数がいるにも関わらず静まり返るスタート地点
に響くアナウンス。ランニングスタートだったので約15秒前からスター
トラインに向かって進み出す。そしてライン真下、時が来た!と思った。
もうとにかく漕いだ。いつもは漕ぐ姿勢やストロークを気にしながら漕

2 of 5

ぐがもうそんなことは思ってもいられずただがむしやりに漕いだ。スタートして真横にはノルウェーがいた。パドルが当たり合う、前に出たら横にはイギリスが視界に入る。出れなかったら終わり。出るんだ、勝負だ。イギリスとも何度もパドルが喧嘩をする。苦しい。よし、出れた。最初の瀬に入る前もう一度自分自身を立ち上げようとするがもうかなりバテてしまってどうしようもなかった。こんなにも早くバテると思っていたのでこの後続く8kmの吉野川が激しく怒り狂う鬼のように見えた。とにかく漕ぐ。それだけしかなかった。

正直、もうこの先は覚えていない。

ただこの8kmは今まで漕いだ中で最低と思ったし、今までにない最高とも思えた。

中間地点、流れが最も弱い小歩危峡。ほぼフラットウォーター。もはや漕いでいるとは言えないぐらいの漕ぎをしていた私はかろうじて動いていたように感じる。チームメイトの声がとびかう。

「右!」「左来てる!」「あわせて!」声を出し合ってパドルのリズムを整える。後ろにはうめき声をあげながら獣のように追ってくるニュージーランド。怖い。何度か越そうと右や左から仕掛けてくる。

自分に負けそうになる、どうしよう、苦しい。初めて小歩危峡に泣かされた。苦しい時ほど前を向いて!とか諦めないで!とかいう言葉がある。人間は本当に苦しい時にはもうそんなこと言ってられないなと思えた瞬間だった。その直後に私の前で漕ぐ水澤主将が「元気出していくよー!」と声をあげた。そして沿道からは聞こえんばかりの大声援。ふと我にかえる事ができた。苦しすぎて世界一が逆に見えなくなっていたその瞬間があった事は事実。応援、仲間に助けられた瞬間があったのも事実。

ゴール地点での応援は物凄かった。漕ぎながら涙が出る。

やるしかない、格好悪い漕ぎでもなんでもいい、やりきる、ただそれだけ。ゴールで待っていてくれるみんなの顔が浮かぶ。いくぞ。世界一はもう目の前。

3 of 5

最後の瀬のカーブを終え、見えた！見えた！ゴール！あとは一直線のみ。叫びながら漕ぐ。後ろから追ってくる獣と同じように。そして、見たかった景色、やっとやっと見えた。ゴール。

ボート内にみんな倒れこむ。力尽きて言葉が出ないが握手を交わすそれぞれの仲間の力は強く長かった。ありがとう。

最終種目が終わった。

今でも忘れはしない表彰式。

君が代。センターポールの日丸。首にかかる金メダル。並ぶ仲間。プレゼンターはThe River Faceの母とも言える人、西村洋子さん。それぞれの首に金メダルをかけていくその姿には涙が流れた。君が代。泣いて歌えなかった。金メダルが取れて嬉しかったのもあるがそれによっての涙ではなく、共に苦しい練習をしてきた仲間への今までの感謝の気持ちがこみ上げてきたり。それと、レース中苦しみの中から応援という形で力をくださった全ての人を思うと涙が止まらなかった。

世界一になれた！やったー！と

喜び舞い上がっていたのは会場を出るまでだった。

1番高い所に立って私に見えたものは強き自分と弱き自分の姿でした。

「世界一は偶然になれるものではない。その資格があるものにしか与えられません。」私が尊敬する方のお言葉。心に響く。

私は今回の世界選手権で初めて選手として出場しました。

「吉野川」私が初めてラフティングをした場所、私が働いている場所、私が住んでいる場所、大好きな人や景色がある場所。そして私が生まれた国、日本。日本開催での選手としての出場。本当に幸せな事と感じています。この吉野川世界選手権に携わってくださった全ての人へ感謝の

気持ちを表したいと思います。私たちの見えないところでどれだけの方々が動いてくださっただろう、どれだけの時間を費やしてくださったのだろう、思えば思うほど胸に響くものがあります。本当にありがとうございました。普段共に働いているラフティングガイドさんのレスキュー体制のおかげで安心してレースをすることができました。大会運営に携わってくださった方々の見えないところでのサポートには驚きました。感謝しきれないのが今にたっても私の心にある想いです。地元ならではの雰囲気、自分の近い人たちにも世界選手権を間近で見てもらうことができたのは良き事でした。

この吉野川世界選手権は地域の方々を巻き込んでできた大会、ラフティングというものを知らなかった方々が知るきっかけになった大会、そして何よりもこの土地の宝、吉野川を世界中に発信できた事は大きかったように思えます。毎年ある世界選手権で出会う各国のラフティング選手たちにも実際に吉野川を肌で感じてもらって、「最高!」「今までにない素晴らしい川だよ!」「ここでの練習は贅沢!羨ましい」などと声をかけてもらった時には幸せを感じました。私は出身が徳島県ではないけれどもこの土地にすごく魅力を感じています。ラフティング競技を通じて素晴らしいものはどんどん発信できるようにしていこうと思います。ラフティング競技をこの土地でする意味はそういう意味もあるように思えます。今回の世界選手権で徳島県が、三好市が、吉野川が、仲間が、ここに住む人々のことが、自分に携わってくださる全ての人の事がもっともっと好きになりました。

縁あって始めたラフティング。巡り合った仲間たち。ここでしか味わえない苦しみ、幸福感、出会い。意味あってここにいることを再認識しました。

世界選手権は心踊り、喜びに満ち、時に恐怖に駆られ、泣きじゃくった、いろいろな感情を抱いたものでした。ラフティングというものはいつも私を困らせ、強くしてくれる。

そんな手強いラフティングに惚れてしまった私は今日も仲間と共に漕ぐ。

記録を残し、記憶に残る、私はそんなラフターになりたい。ラフティング界を担う自分たちの時代がやってきた。さあ、楽しみで仕方ない。

応援していただいた方々本当にありがとうございました。
心に残る大会をありがとうございました。私の人生においての多いな産物です。ありがとう吉野川。ありがとうみんな。